

## 東京 IPO 特別コラム

2021年2月1日 Vol.173

### 今年も人気のテーマはAI、DX、EC

コロナ禍対応に基づく過剰流動性相場は米国株に不安定な潮流をもたらし、その潮流は日本株に押し寄せているようです。先週の米国株で話題となったゲームストップ株の乱高下はその典型例で空売りを敢行したヘッジファンドとそれに対抗したSNSでつながった個人投資家の対峙が見られ、米国議会や規制監督当局にも影響を及ぼそうとしています。かつて日本でもあった仕手株の世界と似た構図が醸成され今後の成り行きに関心が集まりそうです。また、左派対右派の軋轢による米大統領選の混乱に続きミャンマーでの軍部によるクーデター発生は世界政治の混乱の予兆となってきたとも思われます。この後に想定される米中関係の行方も含めますます波乱を覚悟すべきなのかと思われます。こうした中で先週からは株式相場にも調整含みの展開が見られ前回の本コラムでもお伝えした通り、NYダウが3万ドル割れ、日経平均も2万8000円割れの展開となってきました。

多少の株式市場の調整はあっても好需給の下でIPO市場への関心は引き続き高まりを見せつつあります。昨年の2月IPOが3銘柄に過ぎなかったのに対して今年は7銘柄。早くも昨年以上のペースでIPO銘柄が発表されています。果たして今年の活躍銘柄のテーマはどうなるのでしょうか。

昨年の93のIPO銘柄のうち公開価格に対して初値が最も上昇した銘柄は9月にマザーズ上場を果たしたヘッドウォータース(4011)で初値は公開価格の11.9倍にもなりました。この銘柄の場合はテーマがAIということで人気化したものと見られます。また第2位が6月IPOのフィーチャ(4052)。これは画像認識ソフト、自動運転にも絡んでおり、公開価格の9.1倍で初値がついています。3位は10月IPOのタスキ(2987)で不動産テックがテーマとなって7.5倍で初値がついています。これらに続いてDX(デジタルトランスフォーメーション)関連のBranding Engineer(7352)の6倍、AIアルゴリズム関連のニューラルポケット(4056)5.7倍、SI系のアクシス(4012)の5.3倍、ECプラットフォームのインターファクトリー(4057)の5.3倍と続きます。つまり昨年の人気化した銘柄のテーマとしてはAI、DX、ECなどになります。残念ながら初値人気が沸騰し過ぎると後は調整含みになってしまいます。今年もそうした過剰人気には注意が必要だと見られますが、引き続きこうしたテーマ性の銘柄が人気化するものと見られます。前号で報告したQDレーザ(6613)は半導体レーザを中核テーマとしたモノづくりベンチャーですが、この後の2月IPO銘柄ではデジタルマーケティングのPDCAプラットフォームのWACUL(4173)、モバイルオンラインゲームの企画・開発・運営のcoiy(4175)といったオンラインサービス系の銘柄群に関心が集まりそうです。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)